



ACKU 個人山行

2013年6月 北海道の山旅

スケジュール : 2013年6月23日(日)～30日(日)
メンバー : 壺阪祐三(L) 田中信行(途中参加) 高田和三 井上 薫(記)

9～11年前、2002～2004年の3年間(私は2年間)にわたり北海道の100名山を中心とした山をほぼ登った。そして9年ぶりに北海道の山に登る機会を得た。今回は100名山に次ぐ山だ。100名山の登山道はアプローチも良く、鎖なども整備されているが、100名山以外の山は、特に林道などの整備が遅れており、日高山脈のペテガリ岳は入山できず断念せざるを得なかった。また参加メンバー全員が71才を超えており、加齢による体力不足の不安も抱えていた。

・6月23日(日) 曇り 夜8時 宝塚で車にピックアップしてもらい、3名で名神高速を敦賀港へ。午前1時 フェリー出航。ビールで山旅の無事を祈って前祝を上げる。波は穏やかで船は静かに進んで行く。

・24日(月) 曇り時々晴れ。朝 後部甲板に出ると少し暖かい風だが心地良い。二人の若い女性ミュージシャンの演奏を聞きながら、ゆっくりと船旅を楽しむ。夜8時半苫小牧東港着。ガソリンを満タンにし道央、道東自動車道を通り音更帯広ICから、国道241号線を北上。上士幌町を通過して午前1時前 糠平温泉郷の糠平館観光ホテル着。明日早いのでビールを飲み干して直ぐ就寝。

・25日(火) 曇り時々晴れ。2時間の睡眠で3時過ぎ、寝ぼけた頭で登山の準備をし、ホテルが用意してくれた 朝、昼のオニギリを持って、4時 北海道の中央部 東大雪の最高峰で鋭くアルペ的な山容で天を突くニベソツ山 2013mに向かう。今朝から田中信兄が加わり4名となる。1時間弱で杉沢との出会いにある十六の沢の登山口に到着。支度をして5時登攀開始。まず十六の沢を渡るが水量が多く流れが激しいので太い2本の丸太から落ちないように慎重に渡る。急斜面を登って尾根に出る。登り始めは登山道の笹は刈られているが僅か数分で終わり、笹を掻き分けながら登る。背より高い太さの木が何本も倒れて道を塞いでいて、その都度木に登ったり回り道をしたりして体力を消耗する。2ピッチ登ってお腹が空いたので朝の大きなおにぎりをほお張る。暫く登ると雪が現れ、雪と笹の道が繰り返し、雪解け水が流れでいて道がドロドロである。遂に一面の雪となるが、6月の終わりなので流石に雪は柔らかい。更に登るとアカエゾマツの樹林帯から灌木帯となる。小天狗岳手前の小さな岩場を過ぎ下ると天狗のコルである。ダケカンバやミヤマハンノキ帯を登りハイマツと岩礫の広がる斜面となり、眺望が開ける。雲の中に石狩連峰が見え隠れする。ツガザクラが所々に咲いている。前天狗の北西側をトラバースし広い稜線を登ると天狗平となる。視界も広がり3つ4つの岩峰の向こうに、初めて見えるニベソ

ツ山頂上と思われるピークが聳えている。まだまだ先が長そうだ。天狗岳の西斜面を巻きながら高度を上げ細くなった稜線を下る。コルから見上げると東壁が切れ落ちている。3つ4つの岩峰の奥にあるピークが頂上だろうか？ 北斜面を急登しピークを1つ2つと巻きながら登り、西に延びる稜線の上に出る。視界が一気に広がり表大雪の山々や十勝岳の連山も雲の中で見え隠れしている。風が強く冷たい。稜線は細く高度感があり、幾つかのピークの斜面をトラバースしながら登ると頂上である。東側は崖で西側は切れ落ちており、頂上は狭いが展望は開けている。時は午前11時45分。2013mのニペソツ山に2013年に登ることが出来た。強風で冷えるので写真撮影すると直ぐ頂上から下る。



“ホーホケキョ 夏至過ぎて啼く ニペソツ鶯” 山雲；壺阪

・登りで体力を使い果たしているなので、ピーク毎に下りと登りを繰り返すのが更に苦しい。長い長い下りを、岩礫を、雪面を、雪解けのドロドロ道を、倒木と戦いながら下る。夕闇迫る前に下山しようと気が焦る。川の水音が聞こえた時にはやっと終わった。夕暮れまでに下山出来たと安堵感がこみ上げてきた。5時30分下山。最終パーティーも5時50分下山。ガイドブックより大幅に時間が掛り多くの人々に追い抜かれた。全身、特に膝がガクガクで太ももにも力が入らない。年齢によるこのような長時間の登山の限界を感じた。ホテルで汚れた靴、服、ズボンの手入れが辛かった。源泉かけ流しの露天風呂、大浴場で疲れを癒し、赤ワインの味は格別だった。



・26日(水) 曇り時々晴れ 昨日は全精力を使い果たしての早朝から夕闇までの登山となったので、今日は休養日として観光しながら襟裳岬まで行くことにする。

先ず昨日帰りの車窓から、1987年に廃線となった旧国鉄士幌線廃線跡の糠平駅跡を見たが、今朝はこの廃線跡で人造湖の糠平ダム の出現により水没した、タウシュベツ川橋梁、5の沢橋梁等、古代ローマの遺跡を思わせる コンクリート・アーチ橋梁群(めがね橋)の幾つかを見学する、ダムの水位によりアーチ橋が見える時と水没する時があるらしいが、我々が行った時は見えていた。

帯広から南下し太平洋岸にでて、長節湖(ちょうぶしこ)、続いて湧洞湖(ゆうとうこ)の原生花園を見学。ハマナス、ハマエンドウ、エゾカンゾウなどが咲いていた。

更に南下して切り立った崖の、黄金道路、黄金トンネルを通過し、かつては「えりも砂漠」と呼ばれたが今では緑化事業が進みクロマツの国有林になりつつある強風の襟裳岬へ。宿では鮮やかな赤く燃えた「日の入りの太陽」をビールを片手にシャッターを押す。

・27日(木) 雨時々曇り 宿を8時に出発し、日高山脈最南端 海岸沿いのアポイ岳に向かう。アポイ岳は高山植物の宝庫と言われ、アイヌ語の(火を燃やした山)という意味である。登山口にあるビジターセンターはまだ閉まっていた。雨が降り出したのでレインウェアを着て9時登山開始。登山届を出し、広い林道から直ぐに山道となる。ミズナラの樹林帯を1合目、2合目と順調よく登って行く。程なく5合目の休憩小屋があり、雨が激しいので雨宿りする。レインザックをしているがザック等はズブ濡れだ。ハイマツ帯をひと登りすると馬ノ背だ。高山植物はキンロバイ、エゾルリムラサキが咲いているがほん僅かだ。途中ですれ違った女性ガイドによると、今は春と夏の花の端境期で少ないとのこと。一時的に雲が切れ、馬ノ背からアポイ岳山頂、隣の吉田岳が見え、右手一带に太平洋が見える。しかし日高山脈は雲の中だ。吹く風が強く冷たい。ひと登りして12時15分 頂上810mに着くが、ダケカンバと雨のため視界が良くない。

下りもずっと雨だったが3時丁度下山。直ぐそばのアポイ山荘に泊まる。町営の新しく、立派な快適な温泉である。着る物、履く物、全てボイラー室で乾かす。

・28日(金) 雨後曇り 本日千歳空港から帰神する田中信兄をJR 静内駅に送り、日高山脈の大パノラマの展望台となるピセナイ山 1027mに向かう。途中で雨が激しく降り出す。静内ダムから東の沢左岸林道ゲートに到着。ゲートは閉じている。昨日営林署に確認した時、ゲートは開いているとのことだった。雨は激しく、頂上に立っても展望は良くないと思われるので登山は中止する。

・新冠町のサラブレッド牧場村を通り、アイヌ民族の部落 新ひだか町静内の英傑シャクシャイン記念館や沙流郡平取町の二風谷(にぶたに)のアイヌ文化博物館や沙流川歴史館等を見学し、二風谷のアイヌ民宿泊まり。

・29日(土) 曇り フェリー乗船まで時間があるので、ロープウェイで有珠山に登り、昭和新山。洞爺湖を上から観光。下山後有珠山噴火で壊れたホテル跡?などを見学。昼過ぎ支笏湖湖畔の秘湯



丸駒温泉に着く。恵庭岳を背に、樽前山、風不死岳を眺めながら、足元から温泉が湧き出し、浴場と支笏湖を隔てるのは天然の岩場だけの野趣あふれる天然露天風呂で北海道の最後の一時を楽しむ。夕刻苦小牧東港から乗船し、30日夜半敦賀港で下船し、7月1日 午前1時前帰宅。



旧国鉄土幌線（1987年廃線）糠平川にかかるコンクリート橋



原生花園



原生花園

“花盛り 長節花園に われ憩う” 山雲；壺阪



アイヌの像

“大きチャン アイヌの戦 草伸びる” 山雲；壺阪



支笏湖畔

“支笏湖に 夏陽眩しも 丸駒湯” 雲；壺阪



“シンザン”（史上初の5冠馬）の顕彰碑



アポイ岳ビジターセンター



アポイ岳



アポイ岳



アポイ岳



北海道の山旅 (2013年6月)

壺阪祐三記

梅雨時期の近畿を離れ、北海道の広々とした自然の中で過ごすのは誠に気持ちが良い。そう思って、10日ほどの予定で、まだ登れていない十勝のニペソツ山(2013m)と日高のペテガリ岳(1736m)に的を絞り、何時も付き合ってくれる高田和三さんに声をかけた。幸い田中信行さんと井上薫さんが同意してくれて、4人が揃った。

日程調整の結果、和三さんの韓国チェジュ島ツアーや信さんの腸の手術の合間を縫って私の希望よりは少し早い6月の23日に、敦賀港をフェリーで出発することになった。

今年の日本列島は天候不順、行動日と晴れの日が合わず、面白くなかったが、もう少し遅くしていても大差なかったようだ。また、ペテガリ岳への林道は、企画段階の調査でも、利用可能かどうかははっきりせず、ギリギリまで粘って、前日の電話での問い合わせでも開通していないとの事。せめてその姿だけでも拝もうと、展望できるビセナイ山を目指したが、大雨で断念した。この途中、静内湖の上部でペテガリ岳への林道ゲートが閉鎖しているのを確認して山旅は終わった。

日々の行動は薫さんの行動に詳しいが、大きな大きなニペソツ山に4人揃って立てたのは大きな収穫、予想以上に大きくて素晴らしい山だった。しかしまあ、70歳を超えた4人の老登山家には限界に近い山だった。満足満足。

花の山として名高い雨のアポイ岳は、2度ほど登っており、何れの時も夢中になって写真を撮った記憶がある。同行の3人にも其の感動を味わって貰いたいと思い、今回の企画に加えておいたが、花の端境期とは言え期待外れだった。有名になって人が増え過ぎ、花を減らしたようだ。移動日に立ち寄った、余り名の売れていない太平洋の原生花園が、ほぼ其の原始の姿を留めているように見えるのと好対照だった。

アイヌの人達が多く住んでいる二風谷ではアイヌのおばさんが経営する民宿にとまって、エゾフクロウのペンダント購入した。牧場を走る廻る生まれたての道産駒に会ったり、強風の襟裳岬や、今も煙を噴く有珠山から昭和新山を眺めたり、支笏湖最奥の丸駒の湯に浸かったり、北海道を充分満喫した。

ホーホケキョ 夏至過ぎて啼く ニペソツ鶯 (山雲；壺阪)

花盛り 長節花園に われ憩う (山雲；壺阪)

大きチャシ アイヌの戦 草伸びる (山雲；壺阪)

二風谷に カラスの雄叫び 夏涼し (山雲；壺阪)



支笏湖に 夏陽眩しも 丸駒湯 (山雲；壺阪)

北海道山行も今回で終わりか！？

田中信行（2013. 7. 31記）

○北海道は第二の故郷

私は肥後の国生まれの九州男児、故郷の熊本県八代郡氷川町には若くして亡くなった弟や先妻、両親・祖父母の墓があります。10歳違いの弟と妹2人が熊本市内に居住、八代高校の同窓会には墓参りとゴルフを兼ねて毎年帰省しています。唯、心情的には北海道が懐かしい第二の故郷になっています。

2000年春、60歳定年を迎え社命で札幌へ単身赴任しました。同年9月、故郷の三神宮で結婚式を挙げる縁に恵まれ、新婚生活が札幌で始まりました。還暦を迎えたばかりで体力も気力も充実しており、仕事と趣味を両立させ、それこそ好奇心の塊で北海道の大地を駆け巡りました。北海道は内地（本州）に対し外地と呼ばれ、内地では味わえない大自然が広がっており、当時は海外住まいの気分でした。

2003年7月末、札幌発トワイライトエクスプレスに乗車、窓辺に日本海の夕日を見ながら名物のフランス料理を堪能しつつ、神戸に帰りました。つい昨日の様です。僅か3年半の短い札幌生活でしたが、思い出深い友人達や懐かしい風景、例えば2月のウトロ流水群、新緑の大通公園等々沢山あり、北海道は第二の故郷となりました。

○北海道の山と壺阪さん

札幌赴任を機会に、山装備を一新して山登りとスキーを再開しました。当初は家族ぐるみでしたが、翌年からACKUの例会山行になりました。これが5年間続き、北海道の百名山全てと有名な名山を数多く踏破することが出来ました。功労者として尊敬すべき岳友を紹介します。その人は同期の壺阪さんです。国鉄マンだった彼は北海道在住の経歴があり、私の札幌赴任を北海道山行実現のチャンスと捉えた様です。そのキャリアに物を言わせて山行企画を次々と要請、私なりにその期待に答えたと思っています。今回の山行もそうでした。5月の連休明け、突然高田和三兄から「壺阪さんが北海道でやり残した山がある。ニペソツ山とペテガリ岳の山行を企画、参加しませんか？」とのお誘いを受けました。ガイドブックは「ニペソツ山は東大雪山系の穂高岳と言われる名峰」と紹介、「北海道山行も今回で終わりか！？」と腹を括って「6月下旬に北海道ゴルフツアーが決まっている。その前後なら参加できる」と返答しました。間をおかず、壺阪兄から手紙で山行企画書が届きました。調整の結果、6月24日に現地（糠平温泉観光ホテル）でフェリー組と合流することになりました。

6月20日、関西空港からLCC（ピーチ便）で札幌に向けて出発しました。

○ニペソツ山とアポイ岳

糠平温泉観光ホテルで貰った上士幌町の登山ガイドブックは「2013年に標高年のニペソツ山に登る。二度とこない、この時を楽しもう！」と謳い上げていました。



前日に豪雨があり、25日の登山はぬかるみと霧雨に苦行を強いられました。標準コースタイムは登り5時間、下り3時間40分の所要時間でしたが、早朝5時に出発して11時45分に登頂（約7時間）、下りはぬかるみと急坂に足を取られて疲労が倍増、難渋の末に何とか日暮前に下山（約6時間）。13時間に及ぶシビアーな山行でしたが、前天狗から眺めた雲間に現われたニペソツ山の姿は奥穂高の威容そのものでした。暫し「二度とこない、この時を楽しもう！」のセリフが出て来ました。ペテガリ岳は林道が閉鎖されていて断念し、行き先が襟裳岬に変更されました。

翌日は糠平湖畔、十勝川河口橋、原生花園、黄金道路、百人浜、風の館、旅館の落日等々、期待以上の観光ドライブを楽しませて貰いました。

27日の目標はアポイ岳881m、霧雨の中を7時間かけての往復登山となりました。有名な高山植物の群落は端境期に当たり、期待はずれでした。

翌28日、JR 静内駅で皆と別れました。新千歳空港ではピーチ便が極端に遅延したためキャンセルし（払戻金ゼロ）、夕刻 JAL 便で関西空港に到着しました。

○北海道のゴルフ

2010年2月16日（快晴）、和三兄他3名の岳友と共にスキー板を担いで念願のニセコアンヌプリの山頂を踏むことが出来ました。羊蹄山も雲の切れ間から姿を見せてくれ感激しました。帰途、皆と別れて札幌へ。札幌赴任時代の後輩達が懇親会を開いてくれました。その折部下だった女性部長から「冬に山で札幌に来る人は珍しい。次回は初夏のゴルフに来てください」と言われ、以来その機会を伺っていました。今春、社友会ゴルフコンペで会社仲間から「北海道でゴルフをやりませんか？」と誘われました。幹事も引き受けてくれ、6月20日から2泊3日のゴルフツアーが決まりました。

21日はツキサップ GC で、22日は札幌エルム CC で、残念ながら両日とも霧雨模様でしたが、旧交を温めつつ雄大なコースで思い切りゴルフを楽しみました。

○近況報告

2003年7月末、神戸の自宅に戻ってからあっという間に11年の歳月が走馬灯の様に過ぎました。海外トレッキングや国内外のスキー行は誘って頂ける岳友あつての貴重な体験でした。ACKU 例会山行、社友会ハイキングや町歩き、ゴルフ、自治会役員活動、パソコン・デジカメ教室、参禅会及び茶道教室等、第二の人生はそれなりに充実した時間を積み重ねることが出来ました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。

一方、年金受給者になってから山仲間との別れが一段と多くなり、寂しい限りです。

また、古希を過ぎてから老化現象の進み具合が早くなったのか、病院やクリニックでお世話になる回数も一段と増えて来ました。最近、他人事と思っていた胃ガン（早期）を宣告され、胃 MER で神戸中央市民病院に1週間入院しました。病棟で文芸春秋8月号の立花隆・対談記事（がん治療革命）を読みました。「ガンは老化現象」との認識・覚悟（人間誰も老病死から逃れられない）を新たにしました。（了）



“最後”の北海道山旅

高田和三（記）

北海道の山や自然は素晴らしい。私の北海道の山は 1964 年夏、卒業前山岳部最後の縦走で日高の山を登った時に始まります（山代L；3年、牛尾；2年、富田・金井良；1年）。山と人 8 号、「日高中北部」に記録あり。

- * 最終部落で、分教場の空き教室を空けていただき、野菜の差し入れを戴いた事
- * ハエマツ漕ぎの連続で、人っ子一人いない 7 沼のカール（幌尻岳東）でテントを張った事
- * 新冠川上流で、集めた流木を捨て縄で結わえ、いかだを組み「藪こぎと渡渉を免れようとし、危なかった事」
- * 帰りには、札幌で食べ放題のバーベキューをご馳走（直木・武田；先輩）になった事。帰りは「弁当代」しかなく急行「日本海」では、向かい合わせの席のおばさん達から「みかん・菓子」を頂き、帰阪した事。

思い起こせば、楽しい事ばかりでした。其の後、現役諸君が北海道の山行記録を散見でき、多少なりとも、DNAを残せたようで、嬉しく思っております。

さて、定年前に女房と道北を周り、利尻岳にトライしましたが「ローソク岩」まででした。10年前、山岳会の例会担当を拝命し、これ幸いと北海道の山を 4 回ほど実施しました。幸い田中信行さんが、札幌に居を構えられており、押しかけて泊めてもらい、段取りを願い、引っ張りだしました。奥様にも感謝します。例会ではなかったですが、スキーで『ニセコアンヌプリ』に登った事も大きな喜びでした。

今回、壺阪さんから、まだ北海道で残っている山がある「決着をつけよう」、「元気な内に早くやらんと、欠けてゆくぜ」という至言があり、ニベソツ・ペテガリ・アポイを狙いました。「ニベソツ」は往復、標準時間 8 時間のところ 12 時間かかりました。雨の中の「アポイ」、知床や、太平洋岸の原生花園、有珠山・昭和新山、温泉、アイヌ部落など、意義深いものでした。詳細記録は前述の井上薫さん報告を御覧ください。

北海道の山はこれが最後かもしれません。ただ、ロシアと 2-3 年の内に話がつけばですが「爺爺岳（1822m）」には登りたい、と思っております。